



紙頼み

栗山英樹

紙を前に最も緊張した瞬間、そう今でも忘れないが、プロ野球の統一契約書に署名をする時だ。プロに入ってから当り前の実力があるならばいざ知らず、テスト入団という自分の立場を考えれば、そこに署名をする瞬間、緊張のあまり、ミミズがのたくっているようになってしまったのは、自分でも笑ってしまった。ただこのスタートを切るにあたり紙の恩恵は無くてはならないものだった。

野球を始めた小学生時代、常にあったのが紙のボール。基本的には新聞紙を丸めたものだったが、それを打ちまくる。家の目の前に30メートル四方の小さなグラウンドがあったが、ここで打球を打つと、すぐに近所の家のガラスを割ってしまう。

「じゃー何度言ったらわかるんだ、い

い加減にしるー!」初めは子供のやることと大目に見てもらっていたが度重なればそうはいかない。そこで考え付いたのが、紙のボールだった。危険はないし、さらにテープで軽く巻いて硬くすると、ちょうどこの30メートルのグラウンドを越えるか越えないかの飛距離。そのフェンス越えが打ちたくて、家に帰ると友人と毎日何百という数を打ちまくった。これが自分のベースになったのは言うまでもない。こうなればさらに上手くなりたい一心で、子供時代は工夫を重ねる。

部屋の照明下の紐をストライクゾーンまで長くし、そこに紙のボールを貼り付ける。それを夜打つのだが、壁や物にぶつけてしまい、また「こらー、外でやれ」と親父の怒鳴り声、そこでまた研究、紙をわら半紙のような硬いものに替え、あまり動かないようにして、バットも本物ではなく、新聞紙で作るのだ。

こうすると打った紙ボールはまた勝手に打つポジションに戻って、壊れるまでずっと打ち続けることが出来るのだ。

あのイチローさえも子供の頃、日課だったのが新聞紙を丸めたものを部屋の中で200球、トスバッティングするこ



栗山英樹(くりやま ひでき) 1961年東京生まれ。84年ドラフト外でヤクルトに入団。内外野を守るスイッチヒッターとして活躍。89年にゴールデングラブ賞を受賞。90年に引退。現在、スポーツキャスター、プロ野球解説者として活躍する。

とだった。

あの体重移動の素晴らしい形はこの時、生まれたと言っている。

昨年メジャーリーグで殿堂入りしたオズの魔法使いと言われた守備の天才、オジー・スミスも子供の頃、守備の練習のために買い物を入れる茶色のこついで袋を手袋のように形造り、これでゴムまりをずっと捕り続けたことが大きかったと振り返り、この紙のクラブと一緒に殿堂入りした。

こんな紙の存在、実はスポーツ選手にはなくてはならないもの。特に自由に形を変えてくれる性質は一流になる最も大きな要素、創意工夫という発想、思考の方向性を与えてくれるのだ。

そんな紙を前に今では、スポーツを伝えるという立場でものを書く作業を行っているが、10年経っても思い通りにならないのは、子供の頃の付き合い方がちょっと乱暴だったからなのかな? と最近感じることもあるが、切っても切れない紙の皆さん、これからもよろしく!

PAPER COLUMN Vol.7

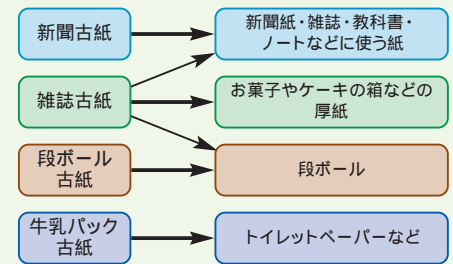
一口に「古紙」と言っても?

「同じ“古紙”なのに、リサイクルに出す時、なぜ新聞紙と雑誌と段ボールに分ける必要があるの?」と疑問に思われたことはありませんか。

それは「古紙の種類によって、できあがる“紙”が変わってくるから」です。

例えば、段ボール古紙から新聞紙へリサイクルされたりしません。新聞古紙は主に新聞用紙に、段ボール古紙は段ボールにと、古紙は、その繊維の性質に合わせたものに生まれ変わるのです。

みなさんのきちんとした古紙の分別が、日本の60%という古紙の高いリサイクル率を支えているのです。



資料:(財)古紙再生促進センター



次回は12月4日号、伊達公子さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpaa.gr.jp>

photo : Yohei Maruyama